

令和2年度 博物館総合評価

博物館評価 実施報告書

(事業実績に関する自己点検評価)

令和3年7月

北海道博物館

令和2年度博物館総合評価 博物館評価 事後評価結果

番号	項目名	第一次自己評価	第二次自己評価
1	資料の収集・保存	A	A
2	展示	A	A
3	調査研究	B	A
4	北海道開拓の村の整備	A	A
5	教育普及事業	A	A
6	ミュージアム・エデュケーター機能の強化	A	A
7	施設及び周辺環境の整備	A	A
8	広報	A	A
9	評価制度の活用と利用者ニーズの把握	A	A
10	道民参加の推進	A	A
11	博物館ネットワーク	A	A
12	情報発信	A	A
13	人材育成機能の強化と社会貢献	A	A
14	研究成果の発信	A	A
15	アイヌ民族文化研究センターの事業	A	A
16	4つのビジョン（重点目標）	A	A

令和 2 年度 博物館評価調書

中期目標・計画番号	1	所管 G	博物館基盤 G			
項目名	資料の収集・保存					
計画策定担当者	学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	杉山智昭	水島未記		550	3,468	
予算計上	<p>【特定重点】</p> <p><input type="checkbox"/>【新規】樺太記憶継承事業 [資料の保管 2,973 千円、財源：基金繰入金、時限付き (15 年間)]</p> <p>【一般施策】</p> <p><input type="checkbox"/>北海道博物館事業費 (資料保存管理) [495 千円]</p>					
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	<p>●【重点/新規】「樺太記憶継承事業」の一環として、一般社団法人全国樺太連盟より受入予定の樺太関係資料 (以下「樺連資料」) 約 6,000 点を収集</p>				
	一般項目	<p>(1) 資料の収集</p> <p>○北海道博物館資料収集基本方針に基づく収集活動を継続的に実施 [年間資料情報件数見込 60 件程度、年間調査収集件数見込約 25 件程度]</p> <p>(2) 収蔵機能の強化</p> <p>○収蔵資料データベースの適切かつ安全な運用・更新</p> <p>○【新規】収集した樺連資料の収蔵・保管</p> <p>△収蔵スペースの確保に向けた検討・取組</p> <p>△災害発生時の被災資料の受入れや保存処理などに対応できる機能と体制の整備に向けた検討・取組</p> <p>(3) 資料保存環境の維持</p> <p>○適切な資料保存環境の維持に向けた取組</p> <p>○文化財保護法にもとづく公開承認施設 (国宝・重要文化財等の公開に適した施設・設備・体制を備えた施設) の更新 [令和 2 年 8 月]</p> <p>(4) 収蔵資料の利用への対応</p> <p>○資料の貸出への対応 [年間見込 25 件 500 点程度]</p> <p>○資料の特別観覧への対応 [年間見込 70 件 1,000 点程度]</p> <p>○資料の模写品等使用への対応 (北海道博物館) [年間見込 120 件 300 点程度]</p> <p>○資料の模写品等使用への対応 (開拓の村) [年間見込 40 件 150 点程度]</p> <p>★「北海道博物館資料審査会」を活用し、館資料の収集、保存、活用について適切に管理 [年間 12 回程度]</p> <p>★「資料収蔵環境管理等に関する連絡会議」を活用し、円滑に資料保存環境を維持</p>				
前年度との主な変更点	/					
直近の協議会評価意見 に対する取り組み	/					

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	/	個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】		中期目標・計画との整合性	a b c	
				年度計画の適切性	a b c	
				協議会評価意見の反映	a b c	
実現の可能性	a b c					
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	評価完了日	年 月 日		
	A B C	【意見】	/			

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入者	山際秀紀（学芸部博物館基盤グループ学芸主査・資料管理）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度博物館基盤グループ 【主査】杉山智昭（資料管理）、添田雄二（展示）、青柳かつら（調査研究） 【係】大坂拓、表溪太、尾曲香織、鈴木あすみ、右代啓視
	水島未記		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	<ul style="list-style-type: none"> ・榊太関係資料の収集：前年度までの懸案事項となっていた榊太関係資料（社団法人榊太連盟からの寄贈資料）の収集・受け入れを実施することができた（受入資料点数5,733点）。 ・資料管理システムの更新：契約期間満了となる資料管理システム「IBMUSEUM」について、新システム「IBMUSEUM SaaS」への移行・更新を行った。 ・榊太関係資料の収蔵・保管：館内の収蔵スペースを再検討し、収蔵・保管のためのスペースを確保し収蔵した。 ・公開承認施設の更新：更新を申請し令和2年8月10日～令和7年8月9日までの承認を受けた（承認番号：第130-3号）。 	
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> ・収蔵資料の利用への対応：新型コロナウイルス感染症拡大による臨時休館中の資料利用の受付休止や、感染対策の徹底などにより、来館をともなう資料利用（特別観覧）の件数が、昨年度の68件から34件へと半減した。 	
	当初計画になかった項目		
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の収集や資料保存環境の維持などの恒常的な活動は、前年度同様に実施することができた。今後も継続して取り組んでいく必要がある。 ・収蔵・保管した榊太関係資料を整理することが今後の課題である。資料整理のためのメンバーを決めてチームをつくり、目録作成に向けた準備を進めていくことが次年度以降の課題である。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	鈴木琢也	個別評価項目	個別評価	
	A	【説明】 榊太関係資料を収集・収蔵・保管できたことは令和2年度の大きな成果であった。年度計画どおりに事業が遂行されたものと判断できる。		事前評価に対する対応の適切性	/	
				年度計画の達成度		a
				状況変化への対応の適切性		a
今後の対応策の適切性	a					
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年7月1日	
	A	【意見】 事業実績が適切に記述され、適切に評価されていると判断できる。特に長年懸案となっていた榊太連盟資料の受入が実施されたことは評価できる。				

令和2年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号	2	所管G	博物館基盤G			
項目名	展示					
計画策定担当者	学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	添田雄二	水島未記		1,987 (10,833)	4,814 (26,425)	
予算計上	【特定重点】 □【新規】樺太記憶継承事業 [資料活用 3,235 千円、財源：基金繰入金、時限付き (15 年間)] 【一般施策】 □北海道博物館事業費 (総合展示) [591 千円] □北海道博物館事業費 (テーマ展) [805 千円] □北海道博物館事業費 (展示会等に必要な機器借上・大型プリンタ) [183 千円] ※そのほか、総合政策部計上の【新規】地域文化発信事業費 (北海道博物館特別展) [24,846 千円、財源：地方創生推進交付金、時限付き] を特別展運営費として充当。					
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	●▲【重点/新規】収集した樺連資料に関する展示				
	一般項目	(1)総合展示室の運営 ○総合展示室における展示資料の入替え [年間延べ 40 点程度] ○クローズアップ展示コーナーの更新 [年間延べ 27 回] ○来館者参加型展示コーナーの入替え [年間延べ 4 回程度] ○第 4 テーマ「今とこれからをつくる」の入替え [年間 3 件] ○学芸員紹介コーナーの入替え [年間 1 回程度] ○休憩ラウンジにおける道民参加型展示 (北海道化石会の協力によるアンモナイトの展示) △【新規】利用者ニーズに基づいた総合展示の検証、段階的部分改修の検討・計画作成・取組 (2)企画展示の開催 ○特別展の開催 [年間 1 回] ○企画テーマ展の開催 [年間 3 回] ○アイヌ文化巡回展の開催 [年間 1 回] 【展示に関わる会議】 ★「北海道博物館展示ワーキングチーム」を活用し、総合展示および企画展示等の事業を円滑に実施 [年間 8 回程度] ★企画展実施チームによる会議を活用し、企画展の事業を円滑に管理・実施 [都度招集・開催]				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	【説明】	個別評価項目		個別評価
	A B C			中期目標・計画との整合性	a b c	
				年度計画の適切性	a b c	
				協議会評価意見の反映	a b c	
	実現の可能性		a b c			
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	評価完了日	年 月 日		
	A B C	【意見】				

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入者	会田理人（学芸部博物館基盤グループ学芸主査・展示）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度博物館基盤グループ 【主査】杉山智昭（資料管理）、添田雄二（展示）、青柳かつら（調査研究） 【係】大坂拓、表溪太、尾曲香織、鈴木あすみ、右代啓視
	水島未記		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	<ul style="list-style-type: none"> 総合展示の改修計画：総合展示の担当チームから改修箇所の意見・要望を募り、展示ワーキングチームにて集約し、中期改修計画を作成することができた。また、令和3年度についての改修予算を獲得することができた。 	
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 学芸員紹介コーナーの入替え：学芸職員の研究等紹介展示の計画を策定し実施することができなかった。 収集した構連資料に関する展示：令和2年度は資料収集・収蔵・保管の年となったため、実施することができなかった。 第6回特別展「北海道の恐竜」の開催：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となった。 第17回企画テーマ展「楽器 見る・知る・考える」の開催：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により開催中止・オンライン開催となった。 第18回企画テーマ展「お葬式」（仮題）の開催：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により開催延期となった。 第19回企画テーマ展「久保寺逸彦文庫」（仮題）の開催：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により開催延期となった。 	
	当初計画になかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 第17回企画テーマ展「楽器 見る・知る・考える」のオンライン開催：ウェブサイト上に特設ページを設け、展示解説パンフレットの公開、展示室内の様子を360度写真で閲覧できるオンライン観覧、詳細な解説動画28本の配信を行った。 特別企画展「北海道の恐竜」の開催：第6回特別展「恐竜展2020」の内容を規模縮小した形で開催した。開催にあたっては、オンライン予約システムによる完全事前予約制、観覧時間制限制限による繰入替制など、新型コロナウイルス感染症拡大防止の対策をとったうえで開催した。また、来館が困難な北海道民に対してもより広く展示観覧の機会を提供できるようオンライン公開も実施した。 	
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> 総合展示室の運営、企画展示の開催などの恒常的な活動は、今後も継続して取り組んでいく必要がある。 総合展示室において実施中の新型コロナウイルス感染症感染対策については、感染収束の状況を適宜踏まえながら、観覧者のサービスの低下につながらないように、見直しを図っていく必要がある。 魅力的な企画展を実施するためには、前年度以前からの準備を充実させる必要があるが、現状では展示構成チームの立ち上げが遅い。博物館の公式な活動として外部との交渉・事前調査等の準備ができるように、早めに準備をする必要がある。 今後5年くらいの企画展の中期計画を作成する必要がある。研究プロジェクトの成果公表などと密接に連動させることも必要である。 企画展への道民参加の割合は十分とは言えず、企画時点で担当職員に意識するよう促すとともに、制度設計を検討し、道民参加型展示を充実させることが今後の課題である。 老朽化、破損の著しい開拓の村内部展示の更新に向けた検討が必要である。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	鈴木琢也	個別評価項目	個別評価
	A	【説明】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、年度計画どおりの企画展事業は遂行できなかったが、オンライン開催、特別企画展「北海道の恐竜」の開催など、コロナ禍のなかでの努力の跡が窺える。また、事業実績の総括や今後の対応策が適切であると判断できる。		事前評価に対する対応の適切性	
				年度計画の達成度	b
				状況変化への対応の適切性	a
今後の対応策の適切性	a				
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年7月1日
	A	【意見】 事業実績の総括や今後の対応策が適切に記述されており、適切に評価されていると判断できる。特にコロナ下で感染対策を実施しながら「北海道の恐竜」の開催は評価できる。			

令和2年度 博物館評価調査書

中期目標・計画番号	3	所管 G	博物館基盤 G (一部社会貢献 G・定例研究報告会業務)			
項目名	調査研究					
計画策定担当者	学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	青柳かつら	水島未記		13,613	15,431	
予算計上	【特定重点】 □【新規】樺太記憶継承事業 [調査研究 300 千円、財源：基金繰入金、時限付き (15 年間)] 【一般施策】 □北海道博物館試験研究費 (外部資金活用) [6,460 千円] □北海道博物館試験研究費 (一般研究) [1,900 千円] □北海道博物館試験研究費 (地域情報集積) [2,985 千円] □北海道博物館試験研究費 (総合研究) [1,717 千円] □北海道博物館試験研究費 (北方文化研究) [2,069 千円] ※アイヌ民族文化研究センターの研究プロジェクト研究費は、北海道博物館事業費 (アイヌ民族文化研究センター・調査研究費) [1,454 千円] として計上 (→「15 アイヌ民族文化研究センターの事業」を参照のこと)					
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	●【重点/新規】収集した樺連資料に関する調査研究 [道費による研究]				
	一般項目	○道民・地域との協働・連携による地域情報集積プロジェクトの実施 [道費による研究：5 課題] ○北海道の自然・歴史・文化総合研究プロジェクトの実施 [道費による研究：4 課題] ○アイヌ民族文化研究センターの研究プロジェクト [道費による研究：2 課題] ○北東アジアのなかの北海道研究プロジェクトの実施 [道費による研究：2 課題] ○科学研究費による研究 (当館職員が研究代表者であるもの) の実施 [競争的外部資金による研究：12 課題] ○科学研究費による研究 (当館職員が研究分担者であるもの) の実施 [競争的外部資金による研究：5 課題] ○科学研究費以外の競争的外部資金による研究 (当館職員が研究代表者であるもの) の実施 [競争的外部資金による研究：1 課題] ○定例研究報告会の実施 [年間 12 回] 【調査研究に関わる会議】 ★「北海道博物館調査研究ワーキングチーム」を活用し、調査研究事業を円滑に実施 [年間 6 回程度]				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見 に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹		個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】		中期目標・計画との整合性		a b c
				年度計画の適切性		a b c
				協議会評価意見の反映		a b c
実現の可能性				a b c		
第二次自己評価	総括評価	学芸部長		評価完了日	年 月 日	
	A B C	【意見】				

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入者	大坂拓（学芸部研究戦略グループ学芸主査・調査研究）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度博物館基盤グループ 【主査】杉山智昭（資料管理）、添田雄二（展示）、青柳かつら（調査研究） 【係】大坂拓、表溪太、尾曲香織、鈴木あすみ、右代啓視 ※研究遂行は、各学芸職員 令和2年度社会貢献グループ 【主査】山際秀紀（博物館交流）、山田伸一（研究交流）、櫻井万里子（図書・情報発信） 【係】大谷洋一
	水島末記（基盤G） 甲地利恵（社貢G）		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・収集した樺連資料に関する調査研究：令和2年度に資料の寄贈を受け、その確認・整理作業を開始し、ある程度の進展を見た。	
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 調査研究活動全般：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、職員の出張調査が思うように実施できず、計画どおりの調査研究活動を遂行できていない研究プロジェクトが多かった。 北東アジアのなかの北海道研究プロジェクトの実施：新型コロナウイルス感染症拡大による海外との往来の事実上の停止により、ロシアのサハリン州郷土博物館やカナダのロイヤル・アルバータ博物館との交流（職員の招聘または派遣事業）が次年度以降に見送りとなった。 定例研究報告会：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、開催数は6回となった（当初計画では12回）。 	
	当初計画になかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 科学研究費による研究（当館職員が研究代表者であるもの）：令和2年度から新たに5課題が採択され、当初計画の12課題から17課題へ増えた。 科学研究費以外の競争的外部資金による研究（当館職員が研究代表者であるもの）：令和2年度から新たに2課題が採択され、当初計画の1課題から3課題へ増えた。 	
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> 【継続課題】調査研究への道民参加については、すでに一部の研究課題で実施しているが、制度設計を含め今後検討・拡充を図っていく必要がある。 樺連資料は次年度以降も含めて最低2年間はかけて整理作業を進め、その後実質的な調査研究の実施となる。 サハリン州郷土博物館との共同研究については、令和2年度に覚書調印、研究内容、研究メンバーの決定ができなかったため、次年度以降早急に進める必要がある。 サハリン州郷土博物館、ロイヤル・アルバータ博物館との共同研究については、共同の研究成果報告書の作成を念頭に置きながら、5か年の調査研究活動・交流を進めていく必要がある。 各研究プロジェクトの研究結果公表のあり方について、研究紀要への論文・調査概要等の執筆はもちろんのこと、企画展等における成果発表を含め、企画展の中期計画と連動した形で位置づけていく必要がある。 各研究プロジェクトの自己点検のあり方について、研究課題評価の実施に向けた検討を進める必要がある。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	水島末記	個別評価項目	個別評価
	B	【説明】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により出張調査ができず、計画どおりの調査研究活動が遂行できなかった。館内での研究もコロナ対応で困難となった場合が多いが、それぞれできる範囲での実施に努めていた。事業実績の総括や今後の対応策の記述は適切である。		事前評価に対する対応の適切性	
				年度計画の達成度	b
				状況変化への対応の適切性	b
				今後の対応策の適切性	a
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年7月1日
	A	【意見】 各研究プロジェクトの計画的な遂行には問題点が見受けられ、十分な研究成果を上げているとは言い難いが、事業実績の総括や今後の対応策などの記述は適切であり、適切に自己点検が実施されていると判断できる。			

令和 2 年度 博物館評価調書

中期目標・計画番号	4	所管 G	企画 G			
項目名	北海道開拓の村の整備					
計画策定担当者	学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	東俊佑	池田貴夫		2,215 (425,573)	2,002 (12,778)	
予算計上	□開拓の村費・百年記念塔施設整備費(開拓の村) [2,002 千円] □【新規】文化振興事業費(開拓の村火災等発生対策費) [10,776 千円、時限付き] ※開拓の村建造物の実施設計及び改修工事は、建設部計上の開拓の村改修工事 [28,182 千円] により建設部が執行予定。					
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)					
	一般項目	○旧近藤染舗の補修工事実施設計(発注:建設部、指導・助言:博物館) ○旧小樽新聞社の実施設計(発注:建設部、指導・助言:博物館) ○旧樋口家農家住宅の老朽度調査 ○旧岩間家農家住宅の老朽度調査 ○令和元年 6 月の落雷により故障した火災報知設備等の修繕実施設計 [延べ 31 か所、発注:建設部、指導・助言:博物館] ○スマートフォンを利用した展示解説アプリ「ポケット学芸員」による多言語解説サービス運用・検証・改善 [6 カ国語、110 コンテンツ] △開拓の村歴史的建造物等の補修計画の検討・調整・作成(計 52 棟+インフラ) △開拓の村歴史的建造物の内部展示改修・改訂計画の検討・調整・作成(計 52 棟) △【新規】「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」(平成 30 年 12 月策定)に関わる具体的取組の検討				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見 に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	【説明】	個別評価項目		個別評価
	A B C	総務部長		中期目標・計画との整合性	a b c	
				年度計画の適切性	a b c	
				協議会評価意見の反映	a b c	
実現の可能性	a b c					
第二次自己評価	総括評価	総務部長	評価完了日	年 月 日		
	A B C	【意見】				

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入者	東俊佑（総務部企画グループ学芸主査・企画調整）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度企画グループ 【主査】東俊佑 【係】遠藤志保、圓谷昂史、鈴木明世
	池田貴夫		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目		
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 旧近藤染舗、旧小樽新聞社の実施設計：実施設計・改修工事を行わず、建設部において大規模改修工事基本計画を策定することとなった。 ポケット学芸員の検証・改善：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、検証を見送った。 	
	当初計画になかった項目		
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> 開拓の村歴史的建造物の保存とそのため改修工事の必要性を、道関係者および道民に対し広く普及啓発し、必要な予算を確保する取組を継続することが必要である。 館全体として開拓の村整備に関する取組を強化していく必要がある。また、内部展示の改修に向けても全館的に取り組むことが必要である。そのための既存業務の見直しをはじめ、人員配置を含めた組織体制の見直し、予算の確保に向けた検討が必要である。 開拓の村歴史的建造物の魅力を高め、ため具体的な検討（紹介冊子の作成など）を行い、開拓の村、北海道博物館を含めた野幌森林公園全体の魅力を高め、「文化観光」の拠点として整備していく取組が必要である。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目	個別評価
	A	【説明】 開拓の村の補修工事、内部展示の改修、野幌森林公園全体の「文化観光」拠点化への取組は、中長期的な課題として取り組まなければならない。事業実績の総括と今後の対応策への記述は適切であると判断できる。		事前評価に対する対応の適切性	
				年度計画の達成度	a
				状況変化への対応の適切性	a
今後の対応策の適切性	a				
第二次自己評価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和3年7月1日
	A	【意見】 今後の対応策の記述は適切であり、自己点検が適切に行われていると判断できる。			

令和2年度 博物館評価調査書

中期目標・計画番号		5	所管G	道民サービスG		
項目名		教育普及事業				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		会田理人	三浦泰之		1,616	671
予算計上		<input type="checkbox"/> 北海道博物館事業費（魅力あるイベント事業）[406千円] ※そのほか、特別展関連普及事業費として、総合政策部計上の【新規】地域文化発信事業費（北海道博物館特別展）の一部を充当[265千円、財源：地方創生推進交付金、時限付き]。 ※解説員（一般職非常勤職員）及び会計年度任用職員の人件費は除く。				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)					
	一般項目	(1)魅力あるイベントの充実 <input type="checkbox"/> 「情報デスク」を活用した交流・誘導[常時] <input type="checkbox"/> 解説員による総合展示の展示解説[常時] <input type="checkbox"/> 総合展示室における「ハイライトツアー」の実施[5~9月の毎日、4月および10~3月の土日祝、14:00~15:00] <input type="checkbox"/> 情報デスクを活用した「学芸員ハローデスク」の実施[祝日・振替休日] <input type="checkbox"/> 総合展示室や特別展示室における「ミュージアムトーク」の実施[一部の祝日・振替休日] <input type="checkbox"/> 総合展示室における「ハンスオン」の実施[一部の祝日・振替休日] <input type="checkbox"/> 総合展示室およびはっけん広場における子供向け「ちゃれんがラリー」の実施[常時] <input type="checkbox"/> 諸行事の実施[年間48件63回] (2)社会的ニーズに合わせた教育普及事業の充実 <input type="checkbox"/> 学校団体および一般団体を対象とした「グループレクチャー」の実施[10メニュー、年間150件7,000人参加見込] <input type="checkbox"/> はっけん広場における学校団体等を対象とした「はっけんプログラム」の実施[6メニュー、年間220クラス7,000人参加見込] <input type="checkbox"/> スマートフォンを利用した展示解説アプリ「ポケット学芸員」による総合展示室多言語解説サービスの運用・検証・改善・拡充[現在6カ国語、374コンテンツ] <input type="checkbox"/> 展示解説器（音声ガイド）を利用した総合展示室多言語解説サービスの運用・検証・改善・拡充[6カ国語、67コンテンツ] <input type="checkbox"/> 学校団体向けワークシートの運用・検証・改善・拡充 <input type="checkbox"/> 令和元年度に開発した視覚障がい者向け「さわれる博物館キット」の運用・検証・改善・拡充 (3)はっけん広場の運営 <input type="checkbox"/> 「はっけんキット」の運用[一般来館者向け、41メニュー] <input type="checkbox"/> 「はっけんイベント」の実施[一般来館者向け、年間7メニュー]				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見 に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】	中期目標・計画との整合性		a b c
			年度計画の適切性		a b c
			協議会評価意見の反映		a b c
実現の可能性			a b c		
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	評価完了日	年 月 日	
	A B C	【意見】			

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入者	遠藤志保（学芸部道民サービスグループ研究主査・教育普及）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度道民サービスグループ 【主査】会田理人（教育普及）、鈴木琢也（利用促進） 【係】田中祐未、亀丸由紀子、渋谷美月、舟山直治
	三浦泰之		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目		
	達成・実現できなかった項目	<p>○新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、展示場において来館者との接触や「さわる」行為を伴う、以下の事業は休止した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合展示室のみどころ解説「ハイライトツアー」、子ども向けスタンプラリー「ちゃれんがラリー」（通年） ・学芸員による展示室での解説イベント「ミュージアムトーク」、さわられる展示イベント「ハンズオン」（祝日） ・体験学習教材「はっけんキット」を使って体験学習ができる「はっけん広場」の運営（通年） ・「はっけん広場」における学校団体向けの体験プログラム「はっけんプログラム」（通年） ・「はっけん広場」における体験型イベント「はっけんイベント」（通年） ・音声による展示解説器（音声ガイド）の貸出（通年） <p>○新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による臨時休館（4月14日～5月24日）や移動制限等もあり、以下の項目では実施件数及び参加人数が当初計画を達成できなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・諸行事の実施（当初計画63回→実施31回）。 ・学校団体等を対象とした「グループレクチャー」（当初計画150回、参加者7,000名→実施59回、参加者3,733名）。 <p>○来館者・学校団体への展示解説を充実させるためのコンテンツ（スマートフォンによる展示解説アプリ「ポケット学芸員」、音声による展示解説器（音声ガイド）、学校向けワークシート、視覚障がい者向け「さわられる博物館キット」等）の検証・拡充等については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大（終息）の状況が見通せなかったことから、年度内には実現できなかった。</p>	
	当初計画になかった項目	<p>○新型コロナウイルス感染症拡大が続くという状況に合わせた事業として、以下のものを実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭で楽しみながら学べるコンテンツをダウンロードできるサイト「おうちミュージアム」（2020年3月より開始）を継続。 ・北海道博物館が提供するコンテンツを追加した（12件）。 ・「おうちミュージアム」の名称・ロゴマークは本事業に参加する道内外の博物館等で共有しており、2020年度は新たに197機関が参加した（合計230機関）。 ・参加機関の担当者同士の意見交換のためのオンライン交流会を2回開催した。 <p>・中止した「はっけんイベント」の代替として、ペーパークラフト等を持ち帰り用キットとして配布した。（3種、配布数合計2,092セット）</p>	
今後の対応策	<p>○「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」（令和2年9月改訂）ができたことから、それに則って、来館者及び職員の安心・安全を守りながら普及行事を開催できる目途が立っている。</p> <p>○今後の新型コロナウイルス感染症の感染拡大（終息）状況を含め、現在の社会状況に合わせて、以下のような教育普及事業の検討・実施が必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来館者と近い距離で行う解説（ハイライトツアー、ミュージアムトーク等）、「さわられる展示」等の体験学習コンテンツ（はっけん広場、はっけんプログラム、はっけんイベント、ハンズオン）について、来館者及び職員の安心・安全対策を講じたうえで再開を図る。 ・来館以外の形による、博物館の資源を活かした教育普及事業として、インターネット上で視聴・体験できるコンテンツの充実を図る。具体的には、「おうちミュージアム」における教材の拡充や、新たに開設した北海道博物館YouTubeチャンネルにおける動画配信（普及行事（講座）のオンライン配信、総合展示解説（グループレクチャー「北海道博物館ダイジェスト」）等）。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	三浦泰之	個別評価項目	個別評価	
	A	【説明】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、年度計画どおりの事業は遂行できなかったが、感染症対策を徹底した上での事業運営や「おうちミュージアム」の取組の継続など、状況変化に対する対応は適切である。事業実績の総括や今後の対応策の記述も適切である。		事前評価に対する対応の適切性	/	
				年度計画の達成度		b
				状況変化への対応の適切性		a
今後の対応策の適切性	a					
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年7月1日	
	A	【意見】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初計画どおりの事業遂行は困難であったが、状況変化に応じて工夫して対応している姿が窺える。自己点検も適切であると判断できる。				

令和2年度 博物館評価調書

中期目標・計画番号	6	所管G	道民サービスG			
項目名	ミュージアムエデュケーター機能の強化					
計画策定担当者	学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	会田理人	三浦泰之		0	0	
予算計上						
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)					
	一般項目	○文化庁や北海道博物館協会（およびそのブロック組織）等において実施されるミュージアムエデュケーター養成関連研修会への職員派遣 [都度実施] ○解説員研修の実施 [都度実施] ○令和元年度に実施した研修会「視覚障がいに対応した博物館づくりに向けて」（主催：北のミュージアム活性化実行委員会）において得られた知見と技術を博物館内で共有 ○「博物館教育プログラム研修会」の実施 [年間1回、8月、対象：学校教員等] ○学校団体向けワークシートの運用・検証・改善・拡充 ○令和2年度より学校教育用補助教材の貸出を本格実施				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹		個別評価項目	個別評価
	A B C	【説明】		中期目標・計画との整合性	a b c
				年度計画の適切性	a b c
				協議会評価意見の反映	a b c
実現の可能性				a b c	
第二次自己評価	総括評価	学芸部長		評価完了日	年 月 日
A B C	【意見】				

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入者	遠藤志保（学芸部道民サービスグループ研究主査・教育普及）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度道民サービスグループ 【主査】会田理人（教育普及）、鈴木琢也（利用促進） 【係】田中祐未、亀丸由紀子、渋谷美月、舟山直治
	三浦泰之		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目		
	達成・実現できなかった項目	<p>○新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、札幌市外への往来を伴うことになる、以下の事業は実施しなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> 博物館業務に関する専門知識及び技能向上のための研修会への職員の派遣。 道内の学校教職員を対象とした、当館及び北海道開拓の村の利用方法を学ぶための「博物館教育プログラム研修会」の開催。 学校教育用補助教材（体験学習用教材）の貸出の本格実施。 <p>○新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、展示場における「さわれる展示」など一部の資料の展示を一時休止しており、展示再開・改訂等の見通しが立たなかったことから、次の事業は実施しなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校団体向けワークシートの検証・改善・拡充。 	
	当初計画になかった項目		
今後の対応策	<p>○ミュージアムエデュケーター機能を強化するための取組</p> <ul style="list-style-type: none"> 【継続課題】館外での研修成果について、資料等の回覧だけでなく、より効果的に受講成果を共有する機会を設ける方法の検討・実施。 <p>○ミュージアムエデュケーター機能によって、博物館を教育的な観点から利用してもらうための取組（いずれも新型コロナウイルス感染症の感染拡大（終息）を含め、現在の社会状況に合わせた検討が必要）</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校団体向けワークシートの内容を改訂・拡充。 2020年3月に本格的に整備した学校団体向け補助教材（体験用教材）貸出の展開の検討。 博物館を利用した学習における学校（教員）からのニーズの把握。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	三浦泰之	個別評価項目	個別評価	
	A	【説明】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、年度計画どおりの事業は遂行できなかったが、学校団体への下見対応など、できる範囲での対応に努めることができた。事業実績の総括や今後の対応策の記述は適切である。		事前評価に対する対応の適切性	/	
				年度計画の達成度		b
				状況変化への対応の適切性		a
今後の対応策の適切性	a					
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年7月1日	
	A	【意見】 事業実績の総括や今後の対応策の記述は適切であり、適切な自己点検が実施できたと判断できる。				

令和 2 年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号	7	所管 G	総括 G			
項目名	施設及び周辺環境の整備					
計画策定担当者	主査	主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	三國正雄 三井義也 古野健太郎	川田宣人		351,151	356,084	
予算計上	<input type="checkbox"/> 北海道博物館管理運営費 [343,098 千円、指定管理負担金(博物館、開拓の村、自然ふれあい交流館、森林公園含む)] <input type="checkbox"/> 野幌森林公園管理費(庁舎等維持費) [3,986 千円] <input type="checkbox"/> 野幌森林公園施設整備費 [9,000 千円]					
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)					
	一般項目	<p>(1)館内施設の整備と活用</p> <p>○屋上スカイビューの特別開放を実施 [4月29日~9月22日までの祝日・振替休日、10:00~16:00、年間10回] ○令和元年度に視覚障がい者を含む利便性向上を目的として整備した階段の段差識別シートおよびトイシ誘導看板の運用・検証 ○第6回特別展「恐竜展 2020」等に連動したオリジナルグッズの開発 ○老朽化した設備の補修・取替 △総合展示室その他館内における案内板等のユニバーサルカラー化等、視覚障がいに対応した博物館づくりに向けた検討・取組 △記念ホールおよびグランドホールの一層の活用に向けた検討・取組</p> <p>(2)周辺環境の整備</p> <p>○野幌森林公園内の危険木の処理および老朽化した設備の改修 △JR北海道、JR北海道バス、指定管理者等と連携し、特にインバウンドを対象としたアクセス向上に向けた検討・取組 △【新規】平成30年度の台風被害や令和元年度のヒグマ出没等をふまえ、野幌森林公園の健全性と安全性の確保に向けた検討・取組 △サインの統一化に向けた検討・取組 △野外展示の具体化に向けた検討・取組</p> <p>(3)野幌森林公園施設との一体的な取組の推進</p> <p>△【新規】「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」(平成30年12月策定)に関わる具体的取組の検討</p> <p>★「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」に係る活用イメージに関する懇談会での議論を踏まえた具体的取組の検討 [令和2年3月から3回程度、主催：環境生活部文化振興課] ★「北海道立総合博物館管理運営等連絡調整会議」を活用し、管理運営に関する連絡体制の強化及び利用者サービスの向上 [年間12回程度] ★道立自然公園野幌森林公園管理運営協議会を活用し、野幌森林公園の保護と利用の促進 [年間1回] ★野幌森林公園林野火災予防消防対策会議を活用し、野幌森林公園の火災を予防 [年間1回]</p>				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見 に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	主幹	個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】	中期目標・計画との整合性	a b c	
			年度計画の適切性	a b c	
			協議会評価意見の反映	a b c	
実現の可能性			a b c		
第二次自己評価	総括評価	総務部長	評価完了日	年 月 日	
	A B C	【意見】			

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月22日	記入者	三国正雄（総務部総括グループ主査・調整）
業務責任者	主幹	業務担当者	令和2年度総括グループ 【主幹】山岸睦 【主査】三国正雄（総務）、三井義也（調整・公園利用）、古野健太郎（調整・施設管理） 【係】西尾千秋、徳本彩
	川田宣人		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	<ul style="list-style-type: none"> 令和元年度末からの新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、断続的に行われた休館措置への対応のほか、5月末からの再開に向け、業種別ガイドラインを踏まえた「北海道博物館 再開に向けた館運営のガイドライン」（要覧119～122ページ参照）を策定し、施設利用者への消毒・検温の実施をはじめ館内における密回避や一部利用制限などによる徹底した感染対策を講じたほか、職員の健康管理や在宅勤務などによる出勤抑制を行った。 	
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 階段の段差識別シート、トイレ誘導看板の運用・検証：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、利用者が減少したことから、具体的な検証は行わなかった。 オリジナルグッズの開発：第6回特別展「恐竜展2020」が中止となったことから、開発は行わなかった。 記念ホール・グランドホールの一層の活用に向けた検討・取組：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、利用者が減少したことから、次年度以降に改めて検討することとした。 アクセス向上に向けた検討・取組：同上。 野幌森林公園の健全性と安全性の確保、サインの統一化、野外展示の具体化：「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」に関わる具体的な取組の検討のなかで実現を図っていくこととした。 	
	当初計画になかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルス感染症拡大に係る対応：「北海道博物館 再開に向けた館運営のガイドライン」を策定し（要覧119～122ページ参照のこと）、ガイドラインに沿った感染対策を実施した。【再掲】 	
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> 【継続課題】アメニティ施設の充実や新たなオリジナルグッズの開発については、指定管理者との調整も必要となるが、指定管理機関（4年間）の問題など現行制度下では新たな商品開発等は困難であるなどの課題がある。 【継続課題】記念ホールなどの施設の活用については、道として策定した「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」における今後の活用イメージにおいて「ユニークベニユーの推進」を掲げており、こうした方針に基づく取組の中で必要な財源の確保も視野に入れた検討が必要。 新型コロナウイルス感染症の拡大・収束状況を踏まえ、「入館受付」等の新たな業務や、特別展等の開催のあり方などについて、指定管理者とも協議しながらその方向性について検討する必要がある。 環境生活部文化振興課が策定した「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」に関わる具体的な取組について、全館的に検討していく必要がある。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	主幹	川田宣人	個別評価項目	個別評価	
	A	【説明】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、年度計画どおりに事業を遂行できなかったが、「館運営のガイドライン」を策定し徹底した感染対策を講じるなど、利用者の安全確保を第一に対応したことは評価できる。		事前評価に対する対応の適切性	/	
				年度計画の達成度		b
				状況変化への対応の適切性		a
今後の対応策の適切性	a					
第二次自己評価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和3年7月1日	
	A	【意見】 事業実績の総括や今後の対応策の記述は適切であり、適切に評価されていると判断できる。				

令和 2 年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号	8	所管 G	道民サービス G			
項目名	広報					
計画策定担当者	学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	鈴木琢也	三浦泰之		724	663	
予算計上	□北海道博物館事業費（広報サービス事業費）[663 千円] ※上記は印刷製本費。発送費は、野幌森林公園管理費（庁舎等維持費）のなかの通信運搬費 [540 千円] より発送分を使用。					
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)					
	一般項目	(1) 広報活動の強化 ○報道機関等への対応（新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、その他）[掲載・報道見込：年間延べ 400 件程度] ○マスメディア向け事前説明会、内覧会の開催 [年 2 回程度] ○職員全員の専門性を活かした広報活動（協力、寄稿、出演等）[年間延べ 100 件程度] ○広報誌・広報媒体の発行・発送 [作成：10 件程度、発送：10 回程度] ○館刊行物の発送 [年 5 回程度] ○ウェブサイトの利便性向上（システムを更新）による情報発信の強化 [年間アクセス数見込、約 260,000 件] ○愛称やロゴの積極的活用 △【新規】愛称およびロゴの浸透に向けた取組に連動し、北海道博物館の建物そのものが「森のちゃれんが」として見て美しい建物として認知され、ブランド化されていくための検討・取組 △海外に向けた情報発信の強化に向けた検討・取組 △修学旅行その他団体旅行の誘致に向けた検討・取組 (2) 他機関との連携による広報活動の強化 ○他機関との連携による広報活動の実施 ・かるちやる net による連携事業の実施 ・CISE ネットワークによる連携事業の実施 ・サイエンスパークへの出展 ・教員のための博物館の日 in 札幌への出展 △【新規】赤れんが庁舎（北海道庁旧本庁舎、改修工事中）のリニューアル事業と連動した北海道博物館の PR				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見 に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹		個別評価項目	個別評価
	A B C	【説明】		中期目標・計画との整合性	a b c
				年度計画の適切性	a b c
				協議会評価意見の反映	a b c
実現の可能性				a b c	
第二次自己評価	総括評価	学芸部長		評価完了日	年 月 日
A B C	【意見】				

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入日	青柳かつら（学芸部道民サービスグループ学芸主査・利用促進）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度道民サービスグループ 【主査】会田理人（教育普及）、鈴木琢也（利用促進） 【係】田中祐未、亀丸由紀子、渋谷美月、舟山直治
	三浦泰之		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目		
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 愛称・ロゴのブランド化に向けての検討・取組：新型コロナウイルス感染症の収束状況を見据え、改めて検討することとした。 海外に向けた情報発信強化：同上。 修学旅行等団体誘致に向けての検討・取組：同上。 教員のための博物館の日 in 札幌への出展：中止となったため、広報活動を実施できなかった。 赤れんが庁舎と連動した博物館のPR：新型コロナウイルス感染症拡大の現状を踏まえ、特に実施しなかった。 	
	当初計画になかった項目	<ul style="list-style-type: none"> オンライン企画展の公開によるHPの充実化：①コロナ禍のため中止となった第17回企画テーマ展「楽器 見る・知る・考える」を、当館「おうちミュージアム」の一環として位置づけ、展示室写真、展示解説動画、パズル等を内容とするオンラインコンテンツとして当館HPで公開した。展示解説動画は当館公式ツイッターでも公開した。②特別企画展「北海道の恐竜」（2/12～3/14 開催）は、従来の展示会紹介ページに加え、展示室写真、展示解説動画等を内容とするオンラインコンテンツを作成し、当館HPで公開した。動画は下記「北海道博物館チャンネル」にて発信した。 動画共有サービス「You Tube」上に公式チャンネル「北海道博物館チャンネル」を開設し、特別企画展「北海道の恐竜」の見どころを解説する動画10本を公開した。 	
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> 【継続課題】愛称、ロゴの活用については、引き続き、取組を進めていく必要がある。 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により離れた博物館利用者を取り戻すべく、感染症収束の状況を見据えながら、広報活動をより一層強化していく必要がある。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	三浦泰之	個別評価項目	個別評価
	A	<p>【説明】</p> <p>新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、従前の広報活動に支障が出た状況のなか、インターネットやSNSを活用した広報活動に積極的に取り組んだことは評価できる。また、事業実績の総括や今後の対応策の記述は適切である。</p>			事前評価に対する対応の適切性
				年度計画の達成度	b
				状況変化への対応の適切性	a
				今後の対応策の適切性	a
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年7月1日
	A	<p>【意見】</p> <p>事業実績の総括や今後の対応策が適切に記述されており、適切に自己点検が実施されていると判断できる。</p>			

令和 2 年度 博物館評価調書

中期目標・計画番号		9	所管 G	企画 G			
項目名		評価制度の活用と利用者ニーズの把握					
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
		東俊佑	池田貴夫		417	416	
予算計上		【環境生活部総務課計上】 □総務管理諸費(各種審議会経費:北海道立総合博物館協議会)[416千円]					
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)						
	一般項目	<p>(1)評価制度の活用 ○前年度事業実績のとりまとめと『要覧』の編集・刊行(7月頃) ○自己点検評価の実施(8月頃) ○「北海道立総合博物館協議会」による重要事項の調査審議 ・「北海道立総合博物館協議会」の開催(年間2回、7月頃および2月頃) ・「北海道立総合博物館協議会アイヌ民族文化研究センター専門部会」の開催(年間1回、8月頃) ○「北海道立総合博物館協議会」による調査審議、内部評価、オーディエンス・リサーチに基づいた事業改善ならびに次年度年間計画の作成 △評価のあり方についての検討・取組 △協議会の進め方についての検討・取組</p> <p>(2)利用者ニーズの把握 ○来館者アンケート調査による利用者ニーズの把握および利用者満足度の測定・分析 ○利用者満足度調査による利用者ニーズの把握および利用者満足度の測定・分析(秋期の一定期間実施) ○来館者調査(出口調査・追跡調査)の実施(年1回) ○日報・口頭受理票による利用者ニーズの把握 △広聴の実施方法についての検討・取組</p>					
前年度との主な変更点							
直近の協議会評価意見に対する取り組み							

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹		個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】		中期目標・計画との整合性		a b c
				年度計画の適切性		a b c
				協議会評価意見の反映		a b c
実現の可能性				a b c		
第二次自己評価	総括評価	学芸部長		評価完了日	年 月 日	
	A B C	【意見】				

令和2年度事業概要

	記入日	令和3年6月20日	記入者	東俊佑（総務部企画グループ学芸主査・企画調整）
	業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度企画グループ 【主査】東俊佑 【係】遠藤志保、圓谷昂史、鈴木明世 令和2年度道民サービスグループ 【主査】会田理人（教育普及）、鈴木琢也（利用促進） 【係】田中祐未、亀丸由紀子、渋谷美月、舟山直治
		池田貴夫 三浦泰之		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	<ul style="list-style-type: none"> 評価のあり方についての検討・取組：従前の「内部評価」「外部評価」のあり方を見直し、「第2期中期目標・計画期 博物館総合評価実施方針」を作成した。 協議会の進め方についての検討・取組：より効率的・効果的な進め方について検討・調整を行い、第2期中期目標・計画期から「博物館総合評価」のなかの「協議会評価」（外部評価）を担うこととなった。 		
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 来館者調査（出口調査・追跡調査）の実施：新型コロナウイルス感染症の影響により、来館者が減少したことや、来館者との直接的な接触を避けるため、調査を見送った。 広聴の実施方法についての検討・取組：組織体制が道民サービスグループと企画グループにまたがったままとなったため、意見集約はそれぞれ従前どおり行うこととし、具体的な検討は次年度以降に行うこととした。 		
	当初計画になかった項目			
	今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> 『要覧』を事業実績報告書と位置づけ、これまでの「事業実績報告書」（内部評価報告書）の内容を含めた形で編集し直す必要がある。 新しい評価体系のもとでの博物館評価（自己点検評価）、協議会評価（外部評価）のしこみを定着させていく必要がある。 利用者ニーズ把握方法（広聴の実施方法）を検討していく必要がある。とくに、令和2年度に新規着手したオンラインアンケートによる広聴手法なども加味して、オーディエンスリサーチの実施方法と事業改善に結びつけていく方法を検討する必要がある。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 評価のあり方を見直し、新たな評価のしこみを構築することができた。今後はそれを運用し、改善を図りながら、館運営の改善に反映させることが大事である。事業実績の総括や今後の対応策の記述は概ね適切であると判断できる。	事前評価に対する対応の適切性		/	
			年度計画の達成度			a
			状況変化への対応の適切性			a
今後の対応策の適切性			a			
第二次自己評価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和3年7月1日	
	A	【意見】 事業実績が適切に記述され、自己点検が適切に行われているものと判断できる。				

令和2年度 博物館評価調書

中期目標・計画番号	10	所管 G	企画 G			
項目名	道民参加の推進					
計画策定担当者	学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	東俊佑	池田貴夫		0	0	
予算計上						
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	(1)道民参加型組織の整備 ●【重点/新規】「ちゅれんが古文書クラブ」の創設・運営 [月 1 回、年間 12 回] ▲【重点】北海道博物館の各種活動に協働参画しかつ館長の諮問に応える支援組織 (ミュージアム・パートナー) の整備に向けた検討・取組 ▲【重点/新規】地域住民の北海道博物館に対する理解促進と愛着醸成、および各種支援・協力による博物館活動の活性化に向けた施策の検討・取組 (2)博物館活動への道民の参画 ▲【重点】さらなる博物館活動への道民参加促進に向けた企画・立案				
	一般項目	(1)道民参加型組織の整備 ○ボランティアによる図書室の閲覧対応、季節に応じた配架工夫、蔵書整理 (2)博物館活動への道民の参画 ○道民・地域との協働・連携による地域情報集積プロジェクト「野幌森林公園の生物インベントリー調査 (第二次)」(再掲)への市民参加 ○来館者参加型展示コーナー (再掲) の運営 ・アイヌ文化 Q&A (総合展示室第 2 テーマ) ・総合展示 2 階出口付近の参加型展示 ○第 4 テーマ「今とこれからをつくる」(再掲) の運営 ○休憩ラウンジにおける道民参加型展示の実施 (再掲) の運営 ○博物館実習生が企画・作成した展示コーナーの運営 (年間夏期 1 回実施)				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見 に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹		個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】		中期目標・計画との整合性		a b c
				年度計画の適切性		a b c
				協議会評価意見の反映		a b c
実現の可能性				a b c		
第二次自己評価	総括評価	総務部長		評価完了日	年 月 日	
	A B C	【意見】				

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入者	東俊佑（総務部企画グループ学芸主査・企画調整）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度企画グループ 【主査】東俊佑 【係】遠藤志保、圓谷昂史、鈴木明世
	池田貴夫		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・ちゃれんが古文書クラブの創設・運営：道民参加型の学習サークル活動としてスタートさせ、初年度において計10回実施した。	
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 北海道博物館の各種活動に協働参画しかつ館長の諮問に応える支援組織（ミュージアム・パートナー）の整備に向けた検討・取組：新型コロナウイルス感染症の収束を見据え、次年度以降に改めて検討を行うこととした。 さらなる博物館活動への道民参加促進に向けた企画・立案：コロナ禍の情勢を勘案し、新たな企画の立ち上げは見送ることとした。 	
	当初計画になかった項目		
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> ボランティア活動、学習サークル活動の推進を基軸とする道民参加型活動は、第2期中期目標・計画期を試行期間と認識し、具体的な活動をいくつか立ち上げて検証を行う必要がある。その検証を踏まえ、第3期中期目標・計画において大胆に反映させていくスケジュールで進める必要がある。 館職員の道民参加型活動促進への理解と取組を深めていく必要がある。今後は、活動メニュー創設の目標値の設定、各研究グループにおける企画立案の促進など、大胆な活動促進策を展開していく必要があると考える。 ミュージアム・パートナー制度の整備は、2015年からの第1期中期目標・計画期以来の継続課題となっている。旧開拓記念館のころにはミュージアム・メイト制度が存在していたことから、少なくともメイトレベルの支援組織を早急に創設する必要がある。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目	個別評価
	A	【説明】 これまで実現に至らなかった道民参加型活動として、「ちゃれんが古文書クラブ」をとりあえずスタートできたことは一つの成果である。今後は職員の意識醸成と環境づくりを段階的に進めていく必要がある。今後の対応策の記述は適切であると判断できる。		事前評価に対する対応の適切性	
				年度計画の達成度	a
				状況変化への対応の適切性	a
今後の対応策の適切性	a				
第二次自己評価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和3年7月1日
	A	【意見】 着実に取組が進められるよう計画性を持って対応していくべきである。道民参加のしくみづくりは重要であり、自己点検は適切であると判断できる。			

令和2年度 博物館評価調書

中期目標・計画番号	11	所管 G	企画 G、社会貢献 G			
項目名	博物館ネットワーク					
計画策定担当者	学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	東俊佑 山田伸一	池田貴夫 甲地利恵		75	75	
予算計上	【環境生活部総務課計上】 <input type="checkbox"/> 総務管理諸費（各種負担金：公益財団法人日本博物館協会会費）[60 千円] <input type="checkbox"/> 総務管理諸費（各種負担金：北海道博物館協会会費）[15 千円] ※北海道博物館協会の運営（事務局館）に係る経費は、北海道博物館協会から支出。 ※ウポポイ・国立アイヌ民族博物館との連携については、総合政策部計上の【拡充】アイヌ文化情報発信強化事業 [12,969 千円、財源：地方創生推進交付金、時限付き] のなかで実施→「15 アイヌ民族文化研究センター の事業」を参照のこと。					
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	(1) 各種博物館団体との連携 ●▲【新規】ウポポイ（民族共生象徴空間）とりわけ国立アイヌ民族博物館との連携を含め北海道内博物館の活性化				
	一般項目	(1) 各種博物館団体との連携 ○日本博物館協会との連携、及び北海道支部長館としての連絡調整業務の実施 ○全国歴史民俗系博物館協議会との連携、及び北海道ブロック幹事館としての連絡調整業務の実施 ○北海道博物館協会との連携、及び事務局館としての運営補佐と連絡調整業務の実施 (2) 博物館交流の促進 ○かるちゃん net の運営と連携事業の実施 ○OCISE ネットワークによる連携事業の実施 ○生物多様性さっぽろ活動拠点ネットワークによる連携事業の実施 ○周辺地域とのネットワーク会議への参加				
前年度との主な変更点	/					
直近の協議会評価意見 に対する取り組み	/					

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】	中期目標・計画との整合性		a b c
			年度計画の適切性		a b c
			協議会評価意見の反映		a b c
実現の可能性			a b c		
第二次自己評価	総括評価	総務部長	評価完了日	年 月 日	
	A B C	【意見】	/		

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入者	東俊佑（総務部企画グループ学芸主査・企画調整）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度企画グループ 【主査】東俊佑 【係】遠藤志保、圓谷昂史、鈴木明世 令和2年度社会貢献グループ 【主査】山際秀紀（博物館交流）、山田伸一（研究交流）、櫻井万里子（図書・情報発信） 【係】大谷洋一
	池田貴夫 甲地利恵		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目		
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 各種博物館団体との連携：新型コロナウイルス感染症拡大により、各種団体が主催する大会・研修会等は中止やオンライン開催となった（※連絡調整業務は従来通り実施）。 	
	当初計画になかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 公益財団法人日本博物館協会主催の第69回全国博物館大会の北海道（札幌市）開催に向けて、大会実行委員会事務局（北海道博物館協会事務局）として各種調整を行った。 コロナ感染拡大による休館の中で開始した「おうちミュージアム」の取組を提唱したことにより全国に広がった。 	
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> これまでどおり、北海道の中核的博物館としての役割を果たしていくことが必要である。 アイヌ民族文化研究センターを中心に、国立アイヌ民族博物館との連携強化を図り、道内博物館の活性化を図っていくことが必要である。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目	個別評価
	A	【説明】 従前どおり、当館の社会的使命である北海道の中核的博物館としての役割を果たしていくべきであり、またその期待は大きい。		事前評価に対する対応の適切性	
				年度計画の達成度	a
				状況変化への対応の適切性	a
			今後の対応策の適切性	a	
第二次自己評価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和3年7月1日
	A	【意見】 適切に総括され、自己点検されていると判断できる。			

令和 2 年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号	12	所管 G	博物館基盤 G、社会貢献 G			
項目名	情報発信					
計画策定担当者	学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	杉山智昭 櫻井万里子	水島未記 甲地利恵		4,765 (5,445)	7,642 (8,322)	
予算計上	□【拡充】文化振興事業費(北海道博物館事業費:情報システム整備費)[7,642千円] ※図書購入費は、北海道博物館試験研究費(情報集積推進事業)のなかの図書購入費[680千円]を充当					
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)					
	一般項目	(1)情報発信機能の強化 ○情報システムの更新による北海道博物館の資料情報の管理・発信(資料情報の一元管理、データの安全な保存、情報セキュリティ対策の実施、情報へのアクセス機能の向上) △情報システムを活用した関係機関とのネットワーク構築に向けての検討・取組 △【新規】『北海道博物館資料目録』の刊行計画の作成 (2)道民の「知りたい」気持ちへの支援 ○図書室の充実[年間利用者見込 3,500人程度(うち図書室のみの利用者 35人程度)、年度末時蔵書数見込 153,000冊程度] ・北海道の自然・歴史・文化についての道民の「知りたい」気持ちに応えた図書の購入 ・北海道博物館の研究や利用者からの問い合わせへの回答に必要な図書の購入 ・図書室の開架部分のレイアウトや表示等を工夫し一般来館者が気軽に利用しやすい環境を整備 ・企画展示および総合展示の理解を深めるための図書の展示を充実 ○レファレンス機能の強化[年間見込 560件程度] ・さまざまな機関、個人からの問い合わせに対し、北海道博物館の専門性と博物館ネットワークを活用し真摯に対応 写真提供[年間見込 120件程度] レファレンス[年間見込 420件程度] アンケートへの協力、その他[年間見込 20件程度] △【新規】レファレンス数の拡充に向けた広報の検討・取組 △多様な方法による多様な分野に関わる問い合わせに対し、利用者にストレスを与えないスムーズな受け答えを可能にするための対応策を検討				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見 に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】	中期目標・計画との整合性		a b c
			年度計画の適切性		a b c
			協議会評価意見の反映		a b c
実現の可能性			a b c		
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	評価完了日	年 月 日	
	A B C	【意見】			

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入者	櫻井万里子（学芸部博物館基盤グループ主査、図書・情報発信）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度博物館基盤グループ 【主査】杉山智昭（資料管理）、添田雄二（展示）、青柳かつら（調査研究） 【係】大坂拓、表溪太、尾曲香織、鈴木あすみ、右代啓視
	水島未記		令和2年度社会貢献グループ 【主査】山際秀紀（博物館交流）、山田伸一（研究交流）、櫻井万里子（図書・情報発信）
	甲地利恵		【係】大谷洋一
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	<ul style="list-style-type: none"> 情報システムの更新：システムの更新を行い、システム全体のクラウド化を進めた。また、収蔵庫などバックヤードまわりのWi-Fi環境の整備を実施し、収蔵庫内全域でシステムを利用可能になった。 	
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 資料目録の刊行：中長期的な刊行計画を作成するため、各研究グループへ検討を依頼したが、刊行に向けた準備体制を構築することができておらず、刊行計画を作成することはできなかった。 	
	当初計画になかった項目		
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> 【継続課題】情報発信のあり方や方法について、グループ横断的に検討していく必要がある。 更新された情報システムの内容を充実させ、資料情報の登録・更新を促進させていく必要がある。 資料情報を蓄積し、『北海道博物館資料目録』刊行や資料管理システムを用いたWEB公開を計画的に進める必要がある。そのためには、各研究グループによる未整理資料の整理や整理済資料情報の拡充等を促進させる必要がある。 当館刊行物や写真等のデジタル化の推進等による博物館基盤情報のアーカイブ化と、その公開・発信に向けた検討が必要である。 レファレンスのあり方（対応方法）や統計の取り方に関し、現在の状況を見直す必要がある。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	鈴木琢也	個別評価項目	個別評価
	A	【説明】 情報システムの更新により、情報発信のための環境整備ができたことは評価できる。今後、中身について充実を図るための基盤情報の整備が課題である。事業総括と今後の対応策が適切であり、館としての今後の課題が明らかになったと判断できる。		事前評価に対する対応の適切性	
				年度計画の達成度	b
				状況変化への対応の適切性	a
今後の対応策の適切性	a				
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年7月1日
	A	【意見】 情報発信のための基盤情報の整備が課題であることが確認できた。今後、計画的・継続的に取り組んでいくことが望まれる。事業実績の総括や今後の対応策の記述は適切である。			

令和2年度 博物館評価調書

中期目標・計画番号	13	所管 G	社会貢献グループ、企画グループ			
項目名	人材育成機能の強化と社会貢献					
計画策定担当者	学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	山際秀紀 東俊佑	甲地利恵 池田貴夫		0	0	
予算計上						
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	(6) 道民の豊かな暮らしづくり・北海道の未来づくりへの貢献 ▲【新規】樺太記憶継承事業の展開計画の作成 ▲【新規】北海道開拓記念館開館 50 年 (2021 年)、野幌森林公園自然ふれあい交流館開館 20 年 (2021 年)、北海道開拓の村開村 40 年 (2023 年)、北海道立アイヌ民族文化研究センター開所 30 年 (2024 年) を機会に実施する事業計画の作成・実施に向けた取組				
	一般項目	(1) 博物館実習生やインターンシップなどの受入れ ○博物館実習生やインターンシップの受入れ [年間 20 人程度] ○職場体験・見学実習の受入れ [年間 10 件、延べ 100 人程度] (2) 外来研究員の受入 △外来研究員 (外部研究者や大学院生等) の受入に関する検討・取組・制度整備 (3) 当館職員の資質向上 ○博物館学系研修会や技術研修会への当館職員の派遣 [年間見込 10 件、延べ 20 人程度] (4) 職員の対外貢献 ○招待講演 (講座・講演会) 等への職員派遣、各種委員・非常勤講師等への就任、学術的な協力 (指導助言等)・執筆依頼等 [年間 150 件程度] (5) 外部機関との連携事業 ○他機関等との連携・協力 [年間 20 件程度] (6) 道民の豊かな暮らしづくり・北海道の未来づくりへの貢献 ○「北海道総合計画」(平成 28 年度～令和 7 年度) などとリンクし、北海道が抱える諸問題の解決、道民の豊かな暮らしづくりと北海道の未来づくりへと結びつく研究・公表を推進 ○アイヌ民族の歴史や文化、和人の歴史や文化、北海道における自然と人との関わり、そしてそれらを総合的に捉え持続可能な共生社会を模索する研究の推進				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】	中期目標・計画との整合性		a b c
			年度計画の適切性		a b c
			協議会評価意見の反映		a b c
実現の可能性			a b c		
第二次自己評価	総括評価	総務部長	評価完了日	年 月 日	
	A B C	【意見】			

令和2年度事業概要

	記入日	令和3年6月20日	記入者	東俊佑（総務部企画グループ学芸主査・企画調整）
	業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度社会貢献グループ 【主査】山際秀紀（博物館交流）、山田伸一（研究交流）、櫻井万里子（図書・情報発信） 【係】大谷洋一 令和2年度企画グループ 【主査】東俊佑 【係】遠藤志保、圓谷昂史、鈴木明世
		甲地利恵 池田貴夫		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目			
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 外来研究員の受入に関する検討・取組・制度整備：受け入れに関する規定類の整備などの検討が必要なことから、昨年度同様、継続課題とした。 樺太記憶継承事業の展開計画の作成：令和2年度は樺太連盟関係資料の受入と目録作成に向けた作業を優先的に実施した。展示等を含めた具体的な展開計画については、検討段階にある。 		
	当初計画になかった項目			
	今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> 博物館実習生の受入：近年、募集人数の上限を20名（令和3年度は新型コロナウイルス感染症対策のため15名）に設定している。受け入れ先がなくて困難な学生がいるので、増やしてほしいとの要望もきているので、柔軟に検討していく必要がある。 外来研究員の受入検討：対象、役割、具体的な活動内容、交通費・報酬・保険等の有無、選定方法等について検討が必要である。アイヌ民族文化研究センター非常勤職員との関係（棲み分け）についての検討も必要である。 博物館実習、インターンシップ、職場体験、見学実習等、博物館として受け入れるものは、可能な限り対応していく方向で、今後も継続する必要がある。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、受け入れ、派遣などが計画通り進まなかった面もあるが、可能な範囲で対応できたものと判断できる。	事前評価に対する対応の適切性		/	
			年度計画の達成度			b
			状況変化への対応の適切性			a
今後の対応策の適切性			a			
第二次自己評価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和3年7月1日	
	A	【意見】 事業が適切に総括され、適切に自己点検が行われたものと判断できる。				

令和 2 年度 博物館評価調書

中期目標・計画番号	14	所管 G	社会貢献 G、博物館基盤 G			
項目名	研究成果の発信					
計画策定担当者	学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	青柳かつら 山際秀紀	水島未記 甲地利恵		665 (1,995)	599 (1,198)	
予算計上	□北海道博物館試験研究費（研究成果の集約・発信）[599 千円] ※上記は、主に『北海道博物館研究紀要』の刊行費。 ※『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』刊行費は、北海道博物館事業費（アイヌ民族文化研究センター・調査研究）により実施 [599 千円]。→「15 アイヌ民族文化研究センターの事業」を参照のこと。					
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)					
	一般項目	(1)学術刊行物などの刊行 ○『北海道博物館研究紀要』第 6 号の刊行 (3 月刊行、900 部) ○『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第 6 号の刊行 (3 月刊行、900 部) ○北東アジアのなかの北海道研究プロジェクト「北海道とサハリン (仮題)」研究成果報告書の刊行 (3 月刊行、900 部) (2)学会への発信 ○学会誌等、館出版物以外の出版物への執筆 [年間 35 件程度] ○学会、研究会等での発表 [年間 20 件程度] 【研究成果の発信に関わる会議】 ★「北海道博物館学術刊行物編集委員会」を活用し、『北海道博物館研究紀要』ならびに『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』の定期的な刊行および水準の確保を保障【『研究紀要』編集委員会：年間 5 回程度、『センター研究紀要』編集委員会：年間 5 回程度】				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹		個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】		中期目標・計画との整合性	a b c	
				年度計画の適切性	a b c	
				協議会評価意見の反映	a b c	
実現の可能性	a b c					
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	評価完了日	年 月 日		
	A B C	【意見】				

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入者	大坂拓（学芸部研究戦略グループ学芸主査・調査研究）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	令和2年度博物館基盤G 【主査】杉山智昭（資料管理）、添田雄二（展示）、青柳かつら（調査研究） 【係】大坂拓、表溪太、尾曲香織、鈴木あすみ、右代啓視 令和2年度社会貢献G 【主査】山際秀紀（博物館交流）、山田伸一（研究交流）、櫻井万里子（図書・情報発信） 【係】大谷洋一
	水島未記		
	甲地利恵		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目		
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 北東アジアのなかの北海道研究プロジェクト「北海道とサハリン（仮題）」研究成果報告書の刊行：新型コロナウイルス感染症拡大による海外研究交流途絶のため刊行を見送った。 	
	当初計画になかった項目		
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> 道費による研究プロジェクト、科学研究費補助金等外部資金を活用した研究課題の研究成果については、今後も継続的に研究紀要等により成果を発信していくことが必要である。研究期間の間に成果が一つも掲載できないことがないように、計画的に研究を進め、成果を発信していく必要がある。 「北海道とサハリン（仮題）」研究成果報告書を刊行する必要がある。 研究成果をわかりやすくまとめた冊子などの刊行の検討を進める必要がある。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	水島未記	個別評価項目	個別評価
	A	【説明】 「北海道とサハリン（仮題）」研究成果報告書刊行以外の事業は、概ね年度計画どおりに遂行できたと評価できる。各研究プロジェクトの成果発信を今後拡充する必要がある。事業実績の総括と今後の対応策の記述は適切である。		事前評価に対する対応の適切性	
				年度計画の達成度	b
				状況変化への対応の適切性	a
今後の対応策の適切性	a				
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年7月1日
	A	【意見】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、出張調査が思うように実施できず、成果の取りまとめに至らなかった研究課題も多かった。困難な状況のなか、これまで通りの質・量を保った学術刊行物を刊行できたことは評価できる。事業実績の総括と今後の対応策の記述は適切であり、自己点検も適切であると判断できる。			

令和2年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		15	所管 G	アイヌ民族文化研究センター		
項目名		アイヌ民族文化研究センターの事業				
計画策定担当者		研究主幹	センター長	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		甲地利恵	小川正人		3,684	3,288
予算計上		□北海道博物館事業費(アイヌ民族文化研究センター分) [資料保存管理: 1,555 千円、調査研究: 1,454 千円、広報: 279 千円] ※そのほか、総合政策部計上の【拡充】アイヌ文化情報発信強化事業 [12,969 千円、財源: 地方創生推進交付金、時限付き] の一部を使用予定。				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	●【重点/新規】樺太記憶継承事業への参画 ▲【重点/新規】北海道立アイヌ民族文化研究センター開所 30 年 (2024 年) を機会に実施する事業計画の作成・実施に向けた取組 ●▲【重点/新規】ウポボイ (民族共生象徴空間) とりわけ国立アイヌ民族博物館との連携を含め北海道内博物館の活性化 (再掲)				
	一般項目	(1) 重点を置いて取り組むべき計画 ・ウポボイ (民族共生象徴空間) とりわけ国立アイヌ民族博物館との連携を含めた北海道内博物館の活性化貢献に向けた検討・取り組み (2) アイヌ文化に関する調査研究とその成果の普及 <調査研究> ・アイヌ民族文化研究センターが主体となって立案し実施する研究プロジェクトの推進 ・北海道博物館全体で取り組む海外との共同研究等の研究プロジェクトへの参画と推進 ・日本学術振興会科学研究費補助金など外部資金を活用したアイヌ文化関連調査研究の推進 ・北海道博物館で取り組む樺太記憶継承事業への参画 (樺太連盟資料の受入と整理の開始) <資料の収集と整理・公開> ・アイヌ文化に関する資料の収集と整理 ・採録等による資料についての公開計画の策定とこれに基づく公開の実施 (諸手続含む) <研究成果の発信と普及> ・『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』(第 6 号) の編集計画の策定と投稿の奨励・推進 ・館内外における教育普及事業 (講座、ワークショップ等) を通じた研究成果の発信や理解促進・教育普及の取り組み ・当館における企画展示の立案・実施 (第 17 回企画テーマ展「楽器 見る・知る・考える」、第 18 回企画テーマ展「お葬式 (仮題)」、第 19 回企画テーマ展「久保寺逸彦文庫 (仮題)」) ・当館における展示資料の入替及び総合展示内クローズアップ展示の更新 ・道内市町村と連携・協力した「アイヌ文化巡回展」の開催 (岩内町での開催を計画) ・アイヌ文化紹介小冊子『ボン カンピソ』(全 1 ~ 9 巻) の増刷・配布 [都度実施] ・当館広報誌『森のちやれんがニュース』の「アイヌ民族文化研究センターだより」などを通じたアイヌ民族文化研究センターの活動に係る情報の発信 (3) アイヌ文化に関する学術情報の集約と発信・研究支援 ・アイヌ文化に関する学術情報 (収蔵資料データ、調査データ、文献情報等) の集約 ・「アイヌ語アーカイブ」など当館ウェブサイトにおける情報発信 <対外支援・社会貢献、博物館等のネットワーク> ・市町村やアイヌ文化伝承活動団体等からの、アイヌ文化の学習や伝承活動、展示等の事業に関する依頼・照会に対する、専門的見地からの助言・支援・協力等。 ・国立アイヌ民族博物館によるネットワーク事業 (設立準備) への参画				
前年度との主な変更点						
直近の協議会評価意見 に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	センター長	個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】	中期目標・計画との整合性		a b c
			年度計画の適切性		a b c
			協議会評価意見の反映		a b c
実現の可能性			a b c		
第二次自己評価	総括評価	学芸副館長	評価完了日	年 月 日	
	A B C	【意見】			

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入者	甲地利恵（アイヌ民族文化研究センター研究主幹）
業務責任者	センター長	業務担当者	令和2年度アイヌ民族文化研究センター 【研究主幹】甲地利恵 【係】遠藤志保、大坂拓、亀丸由紀子、大谷洋一 【非常勤研究職員】佐々木利和、奥田統己
	小川正人		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	<ul style="list-style-type: none"> 「アイヌ文化巡回展」の開催：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により当館の特別展・企画テーマ展が中止となるなか、岩内町において、関係者の尽力により巡回展を開催することができ、関連事業についても定員の制約等があったものの、追加事業も含めて実施することができ、あわせて地域の資料調査も実施することができたことなど、博物館活動やアイヌ文化の理解促進に資することができた。 	
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 採録等による資料についての公開計画の策定：次年度に繰り越しとなった。 第17回企画テーマ展「楽器」の開催：展示内容はやや遅延したものの予定どおり制作できたが、展示室での開会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となった。 第18回企画テーマ展「お葬式（仮題）」、第19回企画テーマ展「久保寺逸彦文庫（仮題）」の開催：新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、展示の準備が困難となったため、次年度以降に開催を延期した。 	
	当初計画になかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 第17回企画テーマ展「楽器」のオンライン開催：ウェブサイト上に特設ページを設け、展示解説パンフレットの公開、展示室内の様子を360度写真で閲覧できるオンライン観覧、詳細な解説動画28本の配信を行った。 令和3年度のアイヌ民族文化財団工芸品展を当館で開催することとなり（当館第18回企画テーマ展として開催計画に乗せた）、その準備に着手、これまでの当館での調査研究の成果を踏まえた展示方針・展示内容を企画する等の取り組みを進めることができた。 	
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> 【継続課題】総合展示第2テーマ「アイヌ文化Q&A」の定期的更新とレファレンス内容の情報共有。 【継続課題】収蔵資料のデータ整備を計画的に進め、収蔵資料データベース等への資料情報の搭載や資料目録の刊行を進めることで、アイヌ文化に関する情報公開・情報発信を強化する必要がある。 【継続課題】アイヌ文化に関するレファレンス・支援依頼の増加傾向を見据え、対応記録の蓄積等による効率的な業務運営を検討する必要がある。 採録等による資料についての公開計画の策定を行う必要がある。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	センター長	小川正人	個別評価項目	個別評価
	A	【説明】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、巡回展以外の展示活動は中止・延期となったが、調査研究、資料収集・公開、研究成果の発信などの活動は例年どおり実施することができた。概ね計画どおりに事業が遂行されたものと判断できる。	事前評価に対する対応の適切性		
			年度計画の達成度		a
			状況変化への対応の適切性		a
今後の対応策の適切性			a		
第二次自己評価	総括評価	学芸副館長	小川正人	評価完了日	令和3年7月1日
	A	【意見】 解決すべき課題が明確に記述されており、適切に評価されていると判断できる。			

令和2年度 博物館評価調書

中期目標・計画番号	16	所管G	北海道博物館(企画G)			
項目名	4つのビジョン(重点目標)					
計画策定担当者	主査	主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
	東俊佑	池田貴夫		0	6,508	82,000 (R2~16年度)
予算計上	<input type="checkbox"/> 【新規】榊太記憶継承事業[6,508千円、財源:基金繰入金、時限付き(15年間)] ※ウポボイ・国立アイヌ民族博物館との連携については、総合政策部計上の【拡充】アイヌ文化情報発信強化事業[12,969千円、財源:地方創生推進交付金、時限付き]の一部を使用予定					
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	○「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」の具体的検討 ○道民参加型活動の推進 ○ウポボイ(民族共生象徴空間)とりわけ国立アイヌ民族博物館との連携 ○榊太(サハリン)に関わる資料の収蔵・保管、調査研究、展示活動を推進する「榊太記憶継承事業」の推進				
	一般項目	/				
前年度との主な変更点	/					
直近の協議会評価意見 に対する取り組み	/					

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	個別評価項目		個別評価
	A B C	【説明】	中期目標・計画との整合性		a b c
			年度計画の適切性		a b c
			協議会評価意見の反映		a b c
実現の可能性			a b c		
第二次自己評価	総括評価	総務部長	評価完了日	年 月 日	
	A B C	【意見】			

令和2年度事業概要

記入日	令和3年6月20日	記入日	東俊佑（総務部企画グループ学芸主査・企画調整）
業務責任者	学芸主幹	業務担当者	業務の運行管理：企画 G ※4 つのビジョン（重点目標）は、博物館職員全員で取り組むものである。
	池田貴夫		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	<ul style="list-style-type: none"> 「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」の具体的検討：令和3年度以降に展開する事業の検討を行い、令和3年度については事業に必要な予算を獲得することができた。 道民参加型活動の推進：学習サークル活動として「ちゃれんが古文書クラブ」をスタートさせることができた。 	
	達成・実現できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> 「樺太記憶継承事業」の推進：樺連資料の受入・収蔵・保管は完了したが、調査研究、展示活動などは行うことができなかった。 	
	当初計画になかった項目		
今後の対応策	<ul style="list-style-type: none"> 「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」の具体的検討：令和3年度に獲得した予算に基づき、各事業を実施していくことが重要である。また、令和4年度以降も必要な予算を獲得していく必要がある。 道民参加型活動の推進：ちゃれんが古文書クラブを令和3年度以降も継続させつつ、他の分野についての学習サークル活動も新たに立ち上げ、支援組織としてのミュージアム・パートナー制度を整備していくことが課題である。また、館長の諮問に応える組織としての旧ミュージアム・メイト的な組織の整備の検討も進めていく必要がある。 国立アイヌ民族博物館との連携：2021年に立ち上がったネットワーク組織のなかで、連携のあり方を模索し、必要な連携事業を実施していくことが今後の課題である。 「樺太記憶継承事業」の推進：まずは令和3年度に受け入れ資料の目録整備を進め、調査研究体制を構築していくことが課題である。 		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目	個別評価	
	A	【説明】 概ね適切に総括されているものと判断できる。		事前評価に対する対応の適切性	/	
				年度計画の達成度		a
				状況変化への対応の適切性		a
今後の対応策の適切性	a					
第二次自己評価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和3年7月1日	
	A	【意見】 計画は着実に一歩ずつ前進していることが読み取れ、適切に評価が行われたものと判断できる。				